



校長会



No.32

三重県小中学校長会 広報 第32号

●発行●三重県小中学校長会 津市桜橋 2-142 三重県教育文化会館内 TEL 059-227-7011
●編集●三重県小中学校長会 広報委員会 ●印刷●光出版印刷株式会社 松阪市久保町 1885-1 TEL 0598-29-1234

昨年度から鳥羽市の離島、菅島小学校に勤めている二年目の校長である。「学校づくりはこうあるべき」と語るほどの実績は持ち合わせていないが、私なりに大事にしたいことがある。

修学旅行で京都駅近くを散策したときのこと、京都駅を目の当たりにした六年生六名が、その大きさに大歓声をあげた。さらに虹色の光に彩られた噴水を見て自然に拍手がおきた。実に純朴な子どもたちである。この純朴さはまさに学校の宝である。その子どもたちが育ってきた島では、昔ながらの風習が今なお残り、その催し自体も楽しいが、それぞれ子どもが活躍する場があり、その中で伝統が受け継がれ、自然とマナーや技能を学んでいけるようになっていて実に面白い。一方、その地域の中で、「島っ子ガイド」なる地元のガイド活動(写真)を、総合的な学習の中で進めているのは本校の教職員である。彼に限らず、すばらしい才能や思いつきをみせる職員も多い。子ども・地域・職員、学校はたくさん「宝」にあふれている。今ある宝を大事にし、最大限に生かしていくことが、「学校づくり」

につながると考えている。

ただ、その宝は小さくて見えにくいものもある。他の事象に紛れて見つけにくいものもある。宝を持ちながらその輝きを自覚していない者もいるかもしれない。宝がより輝くように磨くこと、いや磨くなんておこがましい、輝く可能性のあるものを見逃さないことが「学校づくり」の第一歩だと思う。

校長は、広い視野で学校を見るべき立場であるし、実際そういうことのできる位置にいる。広い視野で、子ども・地域・職員を捉え、たくさん宝を見つけ、その宝を育てていくことで「学校づくり」を進めていきたいと考えている。



私の学校づくり

学校は「宝」がいっぱい、
「宝」を生かすことから

鳥羽市立菅島小学校

校長 花谷 謙二



今日的課題の克服に向けて

防災についての地域と 学校との連携について

四日市市立富田小学校

校長 西村 寛 文



東日本大震災から、一年半以上が過ぎました。この間、特に津波対策について、国・県・市・教育委員会等により、様々な見直しが行われてきました。四日市市でも、沿岸部に位置する学校の屋上への外階段・屋上の手すりの設置、各学校への防災無線の配備等の計画が進められています。本校（海岸から約1km程の位置にあります）でも、この間、避難訓練の見直し（校舎三・四階へ避難）、児童の保護者への引き渡しについての見直し（保護者は自分の身の安全を優先する）、児童への防災教育等

を進めてきました。ただ、児童の登下校時の対応や学校への避難者の受け入れ等については、地域と学校、地域の学校と本校との連携が不可欠の思いを持っています。

そんな中、本地域では、今年六月に津波対応について、地域の自主防災隊、連合自治会、市危機管理室、避難所に指定されている機関（小学校一校、中学校一校、高校二校、国土交通省北勢国道事務所）が集まり会議が開かれました。

会議では、まず、自主防災隊長から、①地域全体の基本的な津波避難計画（可能な人は山側へ逃げる、体の不自由な人・最後まで避難誘導をしていた人は各避難所へ避難する）②地区内の津波避難ビルの指定の状況③津波を想定した地域全体の避難訓練の十月実施、の三点についてお話がありました。その後、各学校から、それぞれの学校の津波避難計画、地域住民の受け入れ可能場所について

現状を伝えました。ある高校からは、津波警報発令後津波が来るまでの間に、生徒たちを山側へ逃がすことができれば、より多くの地域住民を受け入れることが可能なので検討中とのことでした。また別の高校からは、本地域の一番山側にあり多数の避難者が予想されるが、定時制・通信制を有するため夜も生徒が多数在籍しているの、あまり多くの避難者は受け入れられないとの話がありました。こういう具体的なことを話し合える場ができたことをうれしく思っています。

今後、この会議の場で、地域全体の实效性ある避難計画の策定、策定した避難計画の周知、避難所運営について予め地域と学校とで決めておくという良いことの確認等様々な課題が話し合われ、解決に向けて前進していくことを願っています。

今年は、防災以外でも、「通学路の安全」「いじめ問題」「全国学力・学習状況調査の結果」について、保護者・地域の関心が高まっております。本校でもそれぞれに対応を迫られています。どのような問題への対応についても、まずは情報を共有すること、課題を明らかにすること、課題解決に向けて組

織的に対応することの三点を大切に、一歩ずつ改善に向けて努力していきたいと考えています。

カレンの子どもたち とともに

鈴鹿市立椿小学校

校長 伊藤 嘉 昭



先日、東京・新宿で開催された「日本定住難民とのつどい」に参加してきました。難民のみなさんをサポートしているスタッフと交流した後、ミャンマーやカンボジアなどの難民のみなさんの民族舞踊を拝見しました。現在、日本にはインドシナ難民・条約難民等、一万人を超える人々が日本に定住してみえますが、「第三国定住難民」をご存知でしょうか。

日本はパイロット事業として「第三国定住による難民の受け入れ」を決定し、平成二十二年九月、タイのメラキャンに滞在するミャンマー難民（カレン族）の中から、第一陣として五家族二十七

名の皆さんを迎えました。半年間の研修をうけた後、平成二十三年四月より、三家族十五名が鈴鹿で生活を始めました。現在、六名の子どもたちが本校に在籍しています。

一年半たった今、子どもたちは立派に三重弁（？）を駆使し、友達と一緒に遊んでいます。両親も、通訳を介さず意思疎通ができるまでに日本語を習得されています。

現在に至るまでには関係機関・団体との連携が大きな役割を果たしてきました。鈴鹿市の担当課、教育委員会はもちろん、自治会・子ども会・事業所・保育園等それぞれの立場でサポートを行ったり、連携のための会議を開催したりしてきました。

来日の子どもたちを受け入れる、ということは多くの学校で取り組んでいる事ですから基本的に大きな違いはありません。しかし、○国の情勢やその混乱から逃れるために難民となったという政治的な背景があること。

○同じ民族の人が日本国内では少数であるため、身近に相談（通訳）できる人がいないこと。

○社会生活・学校制度・生活習慣が全く異なること。

という点において配慮が必要で

す。日本の生活とメラキャンプでの生活は大きく異なります。母語が同じ人々がいつでも集まれる地域であれば、困った時に安心して相談ができますが、カレン族の皆さんはそれができません。ですから、日本での生活は不安が多かったのではないかと思います。私たちにはあたり前のことでも、カレンの子どもたちや保護者にとっては未知の領域がいっぱいあるので

す。
たとえば、遠足一つとっても、「遠足って?」「弁当?」「敷物?」「何に使うの?」……。遠足という経験がないのですからわからないのも当然です。できるだけ直接家庭訪問し、写真や実物を持って説明する「直接訪問」「丁寧な説明」に心がけました。ジェスチャーまじりで話すと意外と伝わるものです。ちなみに、「お弁当」については事業所の方が家に訪問して一緒に作ってくださいました。

また、学校と自治会・子ども会・保育園・事業所とが相互に連絡を取り合うことにより、保護者の悩みや不安といった課題の早期発見・解消へとつながり、安心感を提供できたのではないかと考えています。

多文化共生の観点から、授業に

も取り組んできました。家庭科でカレンのお菓子作り、総合的な学習の時間での民族衣装の紹介、日常的にカレン語であいつ、…。お母さんをお願いしてカレン族の料理と一緒に作る計画もしています。

クラスの子にとっても初めて迎えた外国からの友だち。子どもたちには様々な繋がりの中で、国際的な感性を備えた社会人に成長していつてほしいと考えています。

保幼小中連携 十五年間の教育を通して

津市立東橋内中学校

校長 内 田 実



本校区は津市の岩田川と安濃川

にはさまれ、さらに国道二十三号より東側をおもな校区とし、三保育園・一幼稚園・一小学校・一中学校がある。

校区の子どもたちの中には、不安定な生活基盤や生活実態のため、自尊心や自己有用感を高く持てず、学習意欲が低下したり問題行

動となつて表れたりする子どももいる。また、外国につながる児童生徒が毎年増加し、小学校では約四十%、中学校で約三十%在籍しており、基礎学力や日本語指導の面でも大変厳しい状況がある。

そこで、本校区では平成十六年度から保幼小中が連携し、十五年間を通した子どもたちの教育について研究を進めてきた。それにより、ある一定の成果をあげてはきたものの、形骸化や前例踏襲になりがちになつてきていた。昨年度より、それらを精選し、今日的課題に合った現在の研究体制への見直しを進めてきた。

【研究内容】

①基礎学力の向上・定着

○「朝の学習」では、小一から中三まで毎日十分間の読書に取り組んでいる。

○「基礎学習」では、毎日帰りの学活前に二十分間の算数・数学や漢字の基礎学習に取り組んでいる。

○「課外講座」は、毎週水曜日に三重大学生ボランティアの協力で、希望する小中学生が漢字検定や英語検定、数学検定へのチャレンジ学習に取り組んでいる。

○「就学前教育の充実」では、保

幼四園と一小が協力して、四・五歳児を対象にした入学前カリキュラムを作成し、就学前に身につけたい学びの基礎や基本的な生活習慣について研究している。

○「日本語指導の研究」では、保幼から中三までの「外国につながる子どものカルテ」（仮称）を作成し、日本語の習得状況の把握と指導に努めている。

○その他

・各園や小中学校における公開授業

・兼務教員の活用

②異年齢間交流

○保幼小中合同運動会

「けいわつ子運動会」として、中学校の生徒会が中心となり企画・運営しており、児童・園児から頼もしいお兄さん・お姉さんとして認められ、またその達成感から自尊心の育成にもつながっている。

○保幼小中合同文化祭

本年度で十一回目となり、生徒会と児童会で組織する実行委員会が企画・立案している。スティーج発表・体験コーナー・展示コーナーなどで構成されている。三重大学の学生ボランティアの参加もあり、一年間で最も

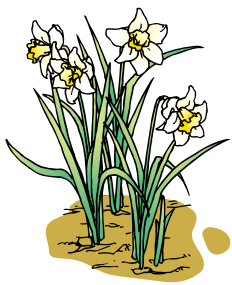
盛り上がる行事となっている。

○幼小中合同避難訓練

海抜約1mの学校から、約2km離れた高台までの津波避難訓練を合同で実施し、自助・共助の心の育成にもつながった。

保幼小中の連携の意義は、教育の連続性と異校種間の子どものたちの繋がりである。また、異校種の教職員が連帯し、教育の連続性の意義をより効果的にしている。

最後に、中学校としての今後の課題は、「社会性の伸長」である。保幼小中の連携の中から育まれている部分もあるが、まだまだ不足していることは間違いない。体験学習や出会い学習などに取り組んではいるが、正しい判断力やコミュニケーション力など課題が山積している。これらの課題の克服には、「人権学習」と「キャリア教育」の充実が鍵となるため、来年度に向けて新しい取り組みを模索していきたい。



全連小奈良大会報告

ともいって回ろう

志摩市立甲賀小学校

校長 小川 雅 弘



一 はじめに

第六十四回全国連合小学校長会研究協議会奈良大会が、十月二十五、二十六日に奈良市で開催された。「新しい時代を拓き、心豊かにたくましく生きる日本人の育成を目指す小学校教育の推進」を研究主題とする最終年度の大会としての位置付けであった。

二 行政説明

文部科学省大臣官房の関靖直審議官から平成二十五年度予算の概算要望等について説明があった。

文教関係予算として、少人数学級の推進など計画的な教員定数の改善をはじめとした社会経済のイノベーションを進める人材育成や、いじめ問題に対する総合的な取り組み、奨学金事業の充実など安心して教育を受けることができ

る「学びのセーフティネット」の構築などの施策に重点化しているとの説明があった。

三 全体会

運営委員紹介の後、本部から総会・研修会等の活動報告があった。文教施策並びに予算についての要望、東日本大震災からの復興に係る要望等を中心に話し合わせ、教職員の定数改善など来年度予算の要望に生かしていくとのことであった。

続いて、主題と副主題の趣旨説明があった。ふるさととの関わりを積極的に教育に位置付け、ふるさとを愛する心を育むことが、子どもたちが夢や希望を持ち、その実現や新しい社会の形成に向かって力強く歩んでいくことにつながるなどの考えから、副主題を「ふるさとを愛し、夢や希望の実現に向かって力強く歩む子どもを育てる学校経営」としたと説明があった。

四 シンポジウム

「ふるさととの絆、未来に託す夢と希望」という題で、前日本コカ・コーラ株式会社前取締役会長 魚谷雅彦氏、日本テレビ放送社会部笛吹雅子氏、春日大社宮司花山院弘匡氏の三人が、奈良で過し



た体験、現在係わっている仕事から感じること、子どもの育成に対する考えや願いなどを述べた。

五 大会宣言決議

研究主題と奈良大会の副主題を基盤に、小学校教育の推進に全力を傾注するため、九項目の決意を表明し、賛成多数で決議された。

第六十四回全連小奈良大会に参加して

熊野市立遊木小学校

校長 甲斐 和美



一日目の午後、特別分科会第二

分散会、教育課題Ⅱキャリア教育・特別支援教育に参加した。「社会的な自立を目指し、将来を切り拓く力を育む学校づくり」を研究課題に愛知県知立市立知立小学校からは、「保護者・地域・関係機関との連携を図る特別支援教育」、京都市立梅小路小学校からは「京都の良さを生かしたキャリア教育推進に向けての学校づくり」のテーマで発表された。

ここでは後半の話し合いに参加したキャリア教育についての報告をしたいと思う。

キャリア教育では、「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通してキャリア発達を促す教育」と定義付け、すべての教育活動で「基礎的・汎用的能力の育成」を目指す取組であった。梅小路小学校では、児童の実態から

身につけさせたい基礎的・汎用的能力を①互いを認めともに学ぶ力②課題を見つけ解決する力③自分を高め力④なりたいたい自分に向かう力、として家庭・地域・関係機関の協力を得ながら、すべての教育活動にその視点を当て様々な体験学習を行っている。そうした教育活動を推進するために校長は①キャリア教育を核とした教育構想②教員の意識改革③PDCAサイクルの徹底④教育環境の整備に取り組みされた。具体的には教職

員の共通理解、指導内容や方法の例示、構想図の常時提示、地域・保護者への啓発、校内の各種委員会組織の整備改善、研修会の充実等である。さらに、今後は手立てや評価規準をどう整理し、どう指導に生かすかが課題であるとも述べられた。

小グループの話し合いでは、各校の教育活動を、キャリア教育の視点で整理し直すことが大切であるとまとめられた。

最後に宮城県や福島県から参加された方の、「東日本大震災の後、多くの地域の方からお話を聴き、思いを感じ、姿を見ることが子どもたちにとって、キャリア教育そのものである。」との発言に深い思いを感じた研修であった。



全日中大阪大会報告

「輝く未来に向け」 大阪大会に参加して

いなべ市立藤原中学校
校長 近 藤 利 彦



一つひとつが最後となる今年度。最初で最後となる全日中大阪大会に参加した。国際会議場を中心に「未来を切り拓く豊かな人間性と創造性を備え、社会において自立的に生きる日本人を育てる中学校教育」を研究主題にして、約二八〇〇名の参加者の下で開催された。

一 行政説明

文科省大臣官房審議官から平成二十五年年度概算要求・要望の説明があった。第二期教育振興基本計画の実現に向けて経費の要求を行っている。効果の有無の検証や公務員数減の中での教職員増に対する風当たりなどの厳しい状況ではあるが、第一の問題として考えているとの報告があった。

二 全体協議

「学校からの教育改革～人材育成の推進～」のビジョンの下、「教職員の資質・能力の向上と使命感の高揚に努める」事が平成二十四年度に決議され、調査が行われた。その調査を基に提案がなされた。

- ① キャリアアップへの動機付け
- ② 組織的な人材育成
- ③ 研修の改善
- ④ 人事考課の活用

を踏まえて対応していく事が望ましいと提案された。そして、鍵となるのは校長のリーダーシップの発揮であることも付け加えられた。

三 大会宣言決議

全日中教育ビジョンに基づく「学校からの教育改革」を推進し、新たな中学校教育の創造に努めるとの決議がなされた。

四 記念講演

「iPS細胞研究の進展」と題して、ノーベル医学生理学受賞者で京都大学の山中伸弥教授の講演があった。

自身やお子さんの教育を振り返り、また、現在の研究の中で感じられている事を主に話された。日本人は勤勉で粘り強いが、話が下手でアイデアに乏しい。アイデアを持ち、それを伝えられる人間を育てていかないと外国に離されていく。そのためにV（ビジョン）W（ワークハード）を大切にしてほしいとの言葉が印象に残った。



第二分科会に参加して

名張市立名張中学校
校長 藤 本 幸 生



大阪大会二日目の第二分科会、『確かな学力の定着を図る指導と評価』に参加しました。北海道地区から二つの実践発表がなされま

した。

一本目は、各学校が作成する「学校改善プラン」について、学力向上のための見直しの視点の明示や進行管理の在り方について研究を進めている岩見沢市校長会の実践発表でした。授業改善と家庭学習を含めた望ましい生活習慣の定着を両輪とした取組の中で、そのプランを継続的に見直し、より効果的・効果的なものにしていくために、校長がPDCAの各段階における見直しの視点を明示し、全職員が共通意識を持つて組織的な見直しが行われていました。また、校長が道・市教委、校長会等の施策をコーディネートし、有効にプランに取り入れられていました。プランを改善する過程そのものが大切であり、教職員の授業改善や学校経営参画の意識が高まりつつあるという報告がなされました。

二本目は、基礎・基本の確実な定着を目指す、指導の工夫・改善に取り組んでいる室蘭市校長会の実践発表でした。アンケート調査を実施するなかで、学力の二極化と底上げ、学習意欲の不足、家庭学習の未定着、また教員の授業力の改善、全校的な取組の確立、情報や危機意識の不足などの課題が浮き彫りとなり、これに対し校長が実態を踏まえた明確な方向性を提示し、市教委や関係機関等と連

携を図りながら、年間及び単元シラバスの活用、個に応じた指導の改善、繰り返し学習の設定など、学校体制で組織的な取組を進めている報告がなされました。また確かな学力の定着に関わって、心の教育や子どもたちの生活改善の必要性も論議されました。

「平成二十六年までに学力を全国レベルに」という北海道の合言葉のもと、校長会としての組織力を生かし、道・市教育委員会や地域、学校が一体となった実践が報告され、参加者からは多くの積極的な意見や感想が述べられ実りある分科会となりました。

様々な教育課題が山積する今だからこそ、「教育のプロ」としての教師の自信が学校への信頼につながる、という言葉がとても印象的でした。



県教育委員会との 懇談会

「学力」「いじめ」を中心に

平成二十四年十月一日（月）
三重県庁にて

【鈴木会長挨拶】

本日、このような時間をとっていただき、ありがとうございます。台風十七号の対応については、現場として悩みましたが、昨年のような大きな被害はなくて安堵しました。

ただ、それ以上に「いじめ」「学力」については大きな風が吹いています。現場を預かる責任者として、これから三重の教育がどのように進んで行くのか、学校としての課題を整理していけるよう、本日様々な意見を交換する中で、歩みを進めていきたいと考えます。

【真伏教育長挨拶】

台風は大禍なくて幸いでした。「学力」「いじめ」が今回の大きなテーマです。「学力」については、昨年来様々な形で取組を行ってきました。全国学力・学習状況調査については、今年は全学校での調査を願っていました。この調査は、実施することが目的ではなく、結果の分析を踏まえて、子どもたちにきちんとした学力を定着させていくためにはどんな取組をしていくか、それを考えていくことが本



来の趣旨です。

「いじめ」については夏休み中に調査を行い、ご苦勞をおかけしました。いずれまともを公表し、必要な対策を講じていきたいと考えています。県としては、調査のあり方を考えながら、子どもたちが本当に困っている状況に対応していきたいと考えます。

県・市町・学校と、立場の違いはあっても、同じ方向で一丸となつて取り組んでいきたいと考えています。



【懇談】

(一) 学力向上について

○学力向上は、子どもたちが未来を切り拓く重要な課題と認識して、各校ともその向上に向け一生懸命取り組んでいる。残念ながら全国学力・学習状況調査の結果は、満足できる結果ではなかった。学校現場も努力している。現場に具体的に方向を示していたら、我々も自信を持って進めていくことができる。

○全国学力・学習状況調査の結果を受けて要改善項目として掲げたものが、まず取り組む内容であると考える。基礎的・基本的な知識・技能を活用する力、特にB問題に課題があるといえる。設問の意図を理解し、自分の考えをまとめて記述するには、各教科における言語活動に着目した授業改善を考えていく必要がある。ただ、学校だけの取組には限界があるので、家庭・地域をも巻き込んだ学力向上県民運動につなげていきたい。

○全国順位はともかく、身につけることが望ましいと考えられている学習内容が、子どもに十分に定着しているかどうかが重要である。三重の子どもの本当の課題を明らかにし、将来にわたって見ていく視点が必要である。

○将来を展望して、すべての教職員が今求められている学力とは何であるのかをきちんと把握し、

各学校の実態に応じた授業改善をしていくことが大切である。一人の日本人として、社会の変化に耐えうる人材たるために、多様な知識・経験を基に応用力を発揮できることを含めて学力ととらえている。また、そこに焦点を当てて、学力向上県民運動として盛り上げていきたい。

○学力向上には、学習に向かう意欲が大切である。また、社会的・文化的体験の豊かさが学力に影響することも事実なので、地域と共にある学校づくりが肝要である。自分たちの学校はどのような取組ができるのか模索しながら、まずはできることから始めていきたい。

○学力向上には、家庭での学習習慣や生活習慣の確立も大切である。県・市町教委の連携を一層強化し、学校、家庭、地域が一体となつて、子どもたち一人ひとりの「確かな学力」の定着と向上に向けた取組を全力で進めていく。そのために、学校でやること、家庭でやること、地域でやることを確認し合いながら取組を進めていかなければならない。学校からは子どもたちの実態を踏まえての積極的な発信をお願いしたい。

(二) いじめ問題について

○いじめを苦にした痛ましい事件がマスコミで採り上げられている。学校では「いつでも、どこ

でも、誰でも」起こり得るという認識の下に、アンテナを高くして取り組んでいる。いじめについて個別アンケートを行ったが、結果を分析し、実態を踏まえた対策を県・市町教委と共に考えていきたい。

○平成二十三年度に比べ、今回の調査では認知件数が増えた。特に小学校で増加した。今回の調査結果も踏まえて、県としては、スクールカウンセラーを派遣するなど、市町教委・学校を支援していきたい。

○認知件数が増えたが、単純増ではなく、個別アンケートが徹底されたため、実態把握がより進んだと考えられる。夏休みというタイミングで件数をまとめて報告してもらった。全国でも認知件数は増加したが、平成二十三年度の現場と、二十四年



度の現場に違いがあったということではない。

○今回の調査で、新しい課題が出てきたわけではない。学校は、これまでも家庭や地域との連絡を密にしていじめ解消に向けて取り組んできた。県としても市町教委と連携し、早期発見・対応のために、調査のあり方を考えていきたい。

【出席者】 県教育委員会

教育長 真伏 秀樹
学習支援担当次長 白鳥 綱重
研修担当次長 西口 晶子
教職員・施設担当次長 信田 信行
育成支援・社会教育担当次長 野村 浩

小中学校教育課課長 鈴木 憲
生徒指導課課長 和田 欣子
市町教育支援・人事監 山本 成之

県小中学校校長会

会長
副会長

鈴木 就二
稲垣 隆
木戸 豊志
曾我 隆清
瀬古久美子

学校経営委員長
副委員長
広報委員長
副委員長

鏡 仁治
近田 芳久
小椋 猛
中川 正生
島田喜美子

※当日の座席表を元に作成しました。

ちよつと いい話

みんなでフオロー！



尾鷲市立宮之上小学校
校長 直江 篤

の時、そばにいた職員が「みんな
でフオローします。頑張りましょ
う！」と言ってくれ、たいへん心
強く思った。

校務分掌等、必要な仕事をみ
なで分担することにした。集会等
はA先生、夏休みの作品関係はB
先生等々。特に運動会の役割分担
はみんなが積極的に担当してく
れ、ありがたかった。雑務等もず
いぶん多くあったが、事務職員や
校務員を中心にみんなでカバーし
てくれた。

そして、心配していた運動会
だったが、例年にもましてすばら
しい運動会となった。それぞれの
職員が自分の担当した係を実に手
際よくこなし、足りない分をカ
バーしようというとなつて頑張っ
てくれた。教頭がいけないというこ
とが、職員一人一人に自覚を促し、
全職員が一つの目標に向かって取
り組む姿勢が出来たんだと思う。

私は四月当初、全職員にこんな
挨拶をしたことを思い出した。「皆
さんは宮小の子どもたちのために
来ている職員です。まず自分の仕
事・持ち場をしっかりとやって頂き、
互いにフオローし合つて、子ども
たちのために頑張ってください。」

まさにとそのことが実行されたので
あった。すばらしい職員たちであ
る。

十月十五日、教頭は元気に学校
に戻ってきた。

知 足

松阪市立西中学校
校長 野呂 一彦



金閣寺からきぬかけの道を下る
と、竜安寺という禅寺があります。
「りょうあんじ」というその寺は、
枯山水の庭が有名です。方丈の縁
に座つて庭を眺めると、どの角度
から見ても全てを見ることはでき
ないように十五個の石が並べてあ
るのだそうです。昔の造園家もな
かなか洒落たことを考えるもので
す。かえつて昔の人の方が小粋な
遊び心を持っていたのかもしれま
せん。

方丈の北側の軒下には、水戸の
黄門さまの寄進とされる蹲踞が置
いてあります。蹲踞とは、茶室に
入る前に手や口を漱ぐための水を
張っておく石のこと。残念ながら
レプリカだそ
うですが、こ
こに刻まれて
いる文字に
は、興味を惹
かれます。如
何なる意味か



写真資料：Wikipedia

と考えたりしていますと、なんと
なく、ゆつくりと流れる時間に包
まれていくようで、心地よい気分
になってきます。人はどんな時に
幸せを感じるのでしょうか。

日本で一番幸せな県は福井県。
以下、富山、石川と続いて、我が
三重県は九番目。ある研究グルー
プの発表を目にしたことがありま
す。どのように決めたのかは知り
ませんが、「幸福度」という言葉は、
気になります。世の中はずいぶん
便利になりました。携帯電話、自
動車、コピーに、コンビニ・・・。
竜安寺が建立された室町の時代
はなかったものが、今はたくさん
あります。さて、昔に比べて今の
人は幸せになったのでしょうか？
どうも便利さと幸福度は、一致し
ないように思われます。

では、どうすれば「幸せ」を捕
まえることができるのでしょうか。
「幸せ」という奴は、あまの
じやくです。追いかけると逃げる
し、与えようとすると返ってくる。
私は常々、周りの人が喜んでくれ
る顔を見て満足できる人は、「幸
せ上手」だと思っています。

「幸せ」のヒントが、蹲踞に刻
まれていました。

「私はこれで十分だから、あなた
がどうぞ」
たまには、こういうのもいいかな。
「吾唯知足」

地区校長会だより

桑名郡市小学校長会

桑名郡市小学校長会は、桑名市の小学校二十七校と桑名郡木曽岬町の小学校一校で構成されています。小学校長会は年間四回の定例会を持ちますが、普段のほとんどの活動は中学校長会（桑名郡市十校）と合同で行い、小中学校長会を年間五回開催しています。また、小中学校長会では、八つの専門委員会を組織して今日的な課題について研修を深めています。

定例の小中学校長会では、事業検討や県校長会の報告を行った後、日頃なかなか時間をとって情報交換ができないので、当面の課題やその年の研修部から提案されるテーマについての話し合いを小グループで行う時間をとっています。今年度のテーマは、「危機管理に強い組織育成のための意図的・計画的な取り組み」です。七月と九月の校長会では生徒指導上の事例とその事例にどう対応したかということについて交流しました。また、一月の会では六グループで話し合われたことを全体で交流する予定になっています。そして、研修部会を中心に来年度の全

連小の研究大会に向けて、校長のリーダーシップの視点で小学校長会の取り組みとしてまとめていきます。

さらに今年度は、長年の要望事項であった桑名市の小学校に教職員校務用パソコンが導入されるため、その管理や運用面について小学校長会としても桑名市教育委員会と話し合いを持ちながら進めています。

また、桑名郡市の小学校へは毎年新規採用教員が多く赴任するた



め、若手教員の育成や防災教育も課題となっており、今後も力を入れて取り組みを進めていきます。

伊賀市中学校長会

伊賀市は、京都・奈良や伊勢を結ぶ大和街道・伊賀街道・初瀬街道を有し、古来より都（飛鳥・奈良・京都など）に隣接する地域として、また、交通の要衝として、江戸時代には藤堂家の城下町や伊勢神宮への参宮者の宿場町として栄えてきました。このような地理的・歴史的背景から、京・大和文化の影響を強く受けながらも独自の文化を醸成し、伊賀流忍者や俳聖松尾芭蕉ゆかりの地としても広く知られており、歴史文化の薫る地域となっています。

しかし、近年の少子化の波は避けられず、伊賀市上野地区校区再編計画に基づき、平成二十一年四月、旧桃青中学校と旧府中中学校が統合されて城東中学校が開校され、さらに平成二十四年四月、旧成和中学校と旧丸山中学校が統合されて上野南中学校が開校されました。

現在中学校は崇広、緑ヶ丘、城東、上野南、柘植、霊峰、島ヶ原、阿山、大山田、青山の十校となり、生徒数は約二千四百名です。

学校マニフェスト

伊賀市では、平成十八年度から学校マニフェストに取り組んでいます。これは「確かな学力の保障」「人権・同和教育の充実」「キャリア教育の推進」という三つの柱を中心に、子どもたちの自立をめざすために取り組むべき努力目標を各学校が具体的に示したものです。保護者や地域の方に公表して評価もいただいています。

中学校長会は、会議を年間九回開催し、伊賀市中学校教育の課題や各校の取組について情報交換や意見交換をしています。

今後も、学校マニフェストを有効に活用し、他校の実践にも学びながら学校経営の質の向上に努めたいと思います。



原稿募集

会員の皆様の投稿をお待ちしています。なお、内容・字数等につきましては事務局へお問い合わせ下さい。

●「校長会みえ」について、御意見、御要望があればお聞かせ下さい。

三重県小中学校長会
広報委員会

編集後記

広報第32号発刊に当たり、執筆を依頼させていただいた先生方には、お忙しい中、早々に原稿をお送りいただきありがとうございます。心より感謝申し上げます。

秋はスポーツの秋・食欲の秋などと言われるほど運動にも適し、美味しい食べ物も豊かにあり、体に栄養をあたえることができます。また、芸術の秋・読書の秋とも言われ、美しい絵画を見たり、音楽を聴いたりすることで心にも栄養をあたえることができます。運動会・文化祭・研究発表会・地域行事等、様々な行事が目白押しのことと思います。校長先生方におかれましては、忙しい中にも充実した日々をお過ごしのことと思いますが、一息ついて体や心に栄養をあたえることも必要ではないでしょうか。どうかご自愛下さい。

さて今号では、各校長の取り組みのほかに全日中大阪大会・全連小奈良大会の報告や県教育委員会との懇談会について掲載いたしました。

この会報が学校の課題に真摯に向き合いその解決に力を注がれている校長先生方に少しでも元気を届けることができれば幸いです。